

東西一丈五尺、南北一丈二尺七寸、高一丈八尺二寸、

〔玉海〕文治元年十二月廿六日乙亥、夜雪高積殆及尺、近年之間、彙少之甚雪也、大將○藤原良通方企雪山、

二年十二月十二日乙酉、雪降及六、七寸、召隨身等企雪山、

〔明月記〕正治二年正月十九日、雪紛々朝天晴、○中略隨身共遲參、無云甲斐、雪朝更不可待、催拂曉著毛

沓參入、必エフリヲ可持、而被尋求之後、適出來、被召仰雪山事、エフリ可給之由申之、尾籠之中尾籠

也、各非父祖子孫歟、無慙也、諸人不得心之故也、於今者、只可沙汰雪山也、汝可爲奉行者、蒙此仰成、恐

祇候、

〔本朝續文粹序〕七言歲暮侍宴同賦積雪爲小山應製詩一首以寒爲韻并序

正家朝臣

于時嚴冬欲暮、積雪正多、占此中庭之勝形、成彼小山之新構、岑巒非高、豈有昇降之峻、溪谷惟窄、更無

烟雲之幽、至于如封任地、勢築依人力、嶺面之欠青、綠羅之黛、永隔巖頭之帶白、紫蓋之形、猶殊者也、既

萍實暮而景冷、蘭缸挑而興闌、在座識者、僉然而曰、我后受文祖於堯年之昔、潤土德於舜日之朝、以詩

書禮樂之道、應萬機以壯皇猷、春夏秋冬之天、送四序以逢叡賞、好文之世、不堪悅乎、正家昔聚竹窓之

寒色、代夜燈兮、遂業今、翫蘭殿之青輝、近春風兮、銷魂慙非、凌雲之才、謬獻賦雪之趣、云爾、謹序、

食雪

〔古今著聞集十一〕後二條殿○藤原師通三月の比、白河の齋院へ參給て、御鞠の會有けるに、老ばし有て、

かさみのきたる重扇をかざして、片手に蒔繪の手箱の蓋に薄様敷て、雪をおほく盛て、日隱の間

の御縁に置いて歸入にけり、御あせなどたりげにて、日隱の間に沓はきながら御尻かけて、御手な

どにてはとらせ給はで、檜扇のさきにて、すこしくひたまひけるが、玄みたる雪にて、御直衣に

かぶりたりけるがとけて、二重裏にうつりていで、むらくに見へける、

〔中右記〕嘉保二年四月廿日、午時許參一院六條殿上皇并郁芳門院共有御見物、○賀茂中略此間從御前下

給雪、炎天流汗之間、人々饗應、暑月給雪、誠以珍事也、